

大和文華館の生立(その8)

おいたち

大和文華館館長 石澤正男



前号で大和文華館では「大和文華」という誌名の美術専門の定期刊行物を機関誌として年4回発行することとなり、その第一号が昭和26年3月1日付で発行されたことを書きました。私立美術館でこの種の美術専門雑誌を刊行することは決して容易な仕事ではありません。私の知っている限り、少なくとも日本においては大和文華館が唯一の例であろうと思います。この季刊誌の刊行は順調に進行して、国内はもちろん海外にも固定した読者をもつに至りました。それには日本語の本文以外に主要論文の命題を始め、図版等にも英語の翻訳を第一号からつけることにしてあったことが与って力があつたと思います。年四回発行の原則は昭和37年1月20日発行の第36号を最後とし、第37号以下は現在に至るまで年二回発行と変更されました。その主な理由は昭和35年の秋に長らく待望されてきた美術館「大和文華館」の建物が完成して一般に公開されることとなり、館員の任務の重点がおのずから美術館公開に伴う多方面な仕事に移行していったためであり、その結果として「大和文華」編集に要する負担も軽減せざるを得なくな

ってきた次第です。それとは別に関係はありませんが、もう一つ付け加えておく必要があると考えられる点は雑誌の性格とも言うべきものが段々変わってきたことであります。「大和文華」発刊の当初は、この雑誌は美術専門誌とは言っても、それほど堅固な学術的論文だけに限定せず、軽い上品なエッセイ(essay)を適宜に織りまぜて、読者が割に気軽に読める雑誌にしようというのが、この雑誌の生みの親であり、また監修責任者であった矢代幸雄先生の基本的構想でありました。このことは私自身先生から伺ったことがあるのでよく記憶しています。先生の脳裡には、これもご自分が提案されて刊行されるに至った美術研究所(現在の東京国立文化財研究所の前身)の月刊誌「美術研究」(後には隔月刊、季刊等に変更しました)が純然たる美術史学の専門誌であるのを念頭におかれての発想であったことは容易に想像されます。ところが「大和文華」も号を重ねて行く間にエッセイ風ものは次第に少なくなり、寄稿を依頼される執筆者の方が「大和文華」に書くとなると、何となく改まった気分になり、堅い論文調のものとなり、今

では当初のものと比較すると随分性格的に変わってきました。「大和文華」は近く第62号が出ることになっています。従来は主として事務用のために逐号の内容目録を用意してあったのですが、雑誌も60号以上になりますと、どうしても分類索引がないと不便ですので、近い将来にそれを作製する予定です。

美術館にとって優れた美術品が一つでも多く收藏されて行くことは、美術館を心の糧として利用される観覧者の方々にとっても、なによりも悦ばしいことに違いありません。度々美術館に足を運ばれる人々にとって、今まで見たことのない優れた新収品に触れることがどれほど新しい感激と期待の喜びを与えるかは、全く想像以上のものがあることは吾々自身もしばしば経験していることであります。昭和23年が大和文華館の美術収集史上、画期的な年であったことは前号で書きましたが、その後原三溪翁の集められた古美術品中の優品は時には業者を通じて間接に、時には昭和23年の時と同様に直接原家から譲られたことが何度もあり、昭和31年には室町時代水墨画山

水図を代表する伝周文筆六曲一双の大作(重要文化財、写真左)や昭和34年に購入された南宋初期の伝趙令穰(号、大年)筆絹本淡彩の水辺群禽図(秋塘図として知られているもの、写真右)などは最も著しい例であります。ここで読者にお知らせしておきたいことは、23年に国宝2件、重要文化財11件、重要美術品1件合計14件からなる旧原コレクションの最も重要な一群の古画の総価格と11年後の34年に購入した上記の伝趙令穰筆水辺群禽図1件の価格が同額であったということです。これは言うまでもなくこの間に生じた驚くべきインフレと、他方優れた美術品が滅多に市場に出なくなったことをも物語っています。大和文華館は現在も美術品の購入を続けていますが、天下の名品を入手することは極めて困難な時勢となりました。この生立の記もこの辺で一旦打ち切り、詳しい記録的なことは昭和45年に大和文華館の創立十周年記念として出版した「大和文華館10年のあゆみ」を見て載せたいと存じます。(51.12.25)

季刊 美のたより No.38

昭和52年 1月20日

発行 大和文華館